

ハンドボールにおける 2 対 2 の突破阻止に関する動きのコツ

—卓越した防御プレーヤーの語りを手がかりに—

関 堯祐 (202010496、ハンドボールコーチング論)

指導教員：山田 永子、會田 宏、藤本 元

キーワード： センターハーフ、ピボット、コツ、タイミング

【目的】

本研究では、卓越したディフェンスプレーヤーを対象にして、6-0 ディフェンスにおける 2 対 2 の突破阻止に関する動きのコツについて明らかにし、センターハーフ（以降 CH）の指導に役立つ知見を実践現場に提供することを目的とする。

【方法】

対象者は玉川裕康選手である。調査方法は質問紙によるアンケート調査およびインタビュー調査が用いられた。アンケート調査の内容はコンディションについて、試合の状況（優勢/劣勢/均衡）について、対人分析についてであった。インタビュー調査の内容はスクリーンをかわす具体的な方法についてである。アンケート調査の回答では得られなかったスクリーンをかわすコツについて、実際の動きの中で説明をしてもらった。

【結果と考察】

(1) ピボット（以降、P）の狙いを予測する

玉川選手は「P を把握できる時間は多くした方が守りやすいと思います。P を触らずに出てしまうと、スクリーンにかかることがあります。準備が遅れてしまうため、極力 P は触っておきます。」と語っている。このことから、ディフェンスは P の位置や、スクリーンを仕掛けるなどの狙いを把握するために P を触っておき、気づかれないタイミングでスクリーンを仕掛けられることを防いでいると考えられる。P との距離感については「自分と P の距離を少し取っておき、スクリーンが来るのと同時に前から被れるように、スペースを確保することを意識しています。」と語っており、距離を少し取っておくことで、P がスクリーンを仕掛けてくる時間を作り、その間にスクリーンが来ていることの認識と、かわすための準備を行っており、P の狙いを予測しやすくしていると考えられる。

(2) P のタイミングをずらす

「スクリーンは P がバックプレーヤー（以降、BP）によるフェイントや、シュートなどの何らかのオフェンスプレーとタイミングを合わせて行うため、そのタイミングを把握するようにしています。」や、「スクリーンプレーの分析をする際に最も重視してい

るのは、スクリーンのタイミングです。」と語っていることから、2 対 2 のスクリーンプレーの成功の鍵はスクリーンを仕掛けるタイミングであり、タイミングをずらすことが突破阻止のコツであると考えられる。タイミングをずらすためには「P の位置を把握しておいて、出る瞬間に押す」や「隣のディフェンダーに P がスクリーンを仕掛ける時には、スクリーンをかわしやすいように、P を押してあげます」と語っていることから、P を押して相手 BP と P のタイミングをずらすことが重要だと考えられる。

(3) スクリーンのかわし方

「前に被る方法が良いと考えます。利点としてディフェンダー 1 人で BP と P の 2 人を同時にマークできる時間が一瞬作れる」と語っていることから、ディフェンスにとって有利な状況を作りだそうとする志向があることが示唆される。ディフェンスが有利な状況とは、センターバック（以降、CB）および P の両方をコントロールしながらシュートやアシストを防ぐことができている状況だと考えられる。加えて「右 CH の時に左側にスクリーンが来た場合、左足→右足の順に動かします。スクリーンが来た時に右足から動かすと距離が遠いので、カットしに行く前に左足を 1 歩かわします。」と語っている。このことから、1 歩かわしてから P に被ることで、深い位置へのパスをカットすることができると考えられる。

(4) スクリーンにかかった際の対処

「パスする回数が多ければミスする確率も上がるためパスを多くさせたいという願望があります。」や、「CB に『ポン』と出たら P が空いて確率の高いシュートを打たれてしまうため、本来であれば相手シューターに対して流しをとるけど、引っ張りに立つ方に変える」と語っている。このことから、相手のパス回数を増やし、ミスさせる回数を増やすこと、1 対 2 の中に相手と駆け引きをしていることが考えられる。

【結論】

2 対 2 の突破阻止のコツとして、①P の狙いを予測すること、②P のタイミングをずらすこと、③スクリーンのかわし方、④スクリーンにかかった際の対処、の 4 点が明らかになった。